# 和太鼓を通じて見えた世界

「何もないところから草を分けて道を作ってくれた先輩たちの高い壁をどのようにしたら越えられるかが毎年の課題」と語る篠原さん

みのり太鼓 会長

## 篠原 孝司さん

みの～れと共に生活するスタイル
Minole Life のすすめ
No.09

和太鼓との出会いから一六年。大きな壁に何度もぶち当たり、その度に乗り越えクリアしてきた道のりがあるからこそ、大勢の人の心を動かす和太鼓の響きがある。みのり太鼓会長として、一六名のメンバーの茎を太くして大輪の花を咲かせるため日々活躍中。

## 和の文化を育てる

幼い頃から和太鼓の音が大好きだった。「踊りも出来る」と誘われ、新設される『みのり太鼓』に飛び込んだ。

大学三年の時、茨城・東京・福島・長野在住の九名でユニットを組み、全国公演を経験したことで進路を太鼓のプロか就職かで悩む。そんなとき、「自分が今までこだわってきたものを続けてみてはどうだ」と父親の言葉。迷いも吹き飛び公務員試験を受け、現在は市役所に勤務している。

「自分は太鼓があってなんぼ。それだけ太鼓に人生を懸けている。家族の理解があってこそ今の自分があると思う。感謝しています」と笑顔で話す。また、自分が太鼓を続けていくことを「職場の人たちが理解してくれた事に、本当に感謝しています」。

作曲、編曲、振り付けなど創作にあたり、難しさの中にも面白さがある。が、仕上がったときの感動もある。

「舞台創りはフルマラソンのように一人ひとりが築き上げ、いい舞台が出来るようになればいい」。

昨秋、みのり太鼓は四年ぶりに全国グランプリをとった。今、やっと人に苦労を話せるようになったと篠原さん。栄光の影には四苦八苦している自分がいる。もがいてもがいて、何でもがいているのか解らない。落ち込んだこともあったと言う。そんなとき支えてくれた、数多くの地域の人たちに感謝している。

会長として、「昔のメンバーも凄かったけれど、今のメンバーも凄い。誇りです。だからこそ、みのり太鼓全体がファミリーになれるよう、細い糸から縄になれるよう創っていきたい。田舎の善さでもある人間味あふれるグループにしていきたい」と話す。一歩一歩の積み重ねがあったからいまの自分がいる。

一〇月には、四季文化館みの～れで、住民劇団Myuや住民楽団ジョリフォレとともに創るオリジナルミュージカル《RENDA》を国民文化祭の一環として公演する。観客と一体となる舞台を目指す三つの団体が融合する《RENDA》が、どのような感動を呼び起こしてくれるのか、今から楽しみだ。

（藤田佐知子）